

ボールバスターズ・クラブ 参



午前二時。

稲垣泰一郎は、パソコンのディスプレイに、メールの着信を示すアラーム表示が出たのに気づいた。

「やつか……?」

稲垣はすぐにメールボックスを開いた。予想どおり「M u r a」からだった。ファイルが添付されている。

稲垣は、にやりと醜く顔を歪ませて笑った。

「うまくやったらしいな……」

だが、メールを開いて文面を読んだ彼は、さっと青ざめた。

「野郎……ふざけやがって……」

呻くように呟き、携帯電話をとりあげた。

「おれだ……ああ、すぐに来てくれ」

午前三時。都内某所の廃工場。

扉に囲まれた敷地内に、ぼつんと錆びたシャッターの降りた建物があった。シャッターの前に、

一人、村野弘一が不安げにきよろきよろしながら立っている。

「よくこんなとこ、知ってたね」

閉鎖中の鎖のかかった正門からは死角になっている物陰に隠した車のなかで、晴美が欠伸をかみ殺した。

「昔、撮影に使った場所なの。ここなら人は来ない」

運転席で涼子が答えた。晴美がまた茶々を入れた。

「整形前のヌード撮影？」

涼子は振り返って後部座席の晴美を睨みつけた。

「ちゃんと服着てました！」

「興奮しないで」

助手席の美紀が冷静な声音で言った。

「おいですなつたよ」

正門の鉄鎖を乗り越えて、三人の人影が現れた。

「ちよ、ちよっと三人いるじゃん」

晴美と涼子は慌てた。

「一人じゃねえのかよ」

美紀が落ちつき払って言った。

「一人が一人ずつ片づけなければいいだけよ」

「ちよっと待ってよ」

涼子が抗議した。

「あんたとは違うのよ、私たちは……」

「わかったわかった。私が一人で片づけるよ。危なくなったら、援護をお願い」

美紀はそう言い、そっと車のドアを開けた。

三人は、ゆっくりと弘一に近づいた。四十代半ばの小太りの男を中央に、二十代前半の痩せた背の高い男と、がっしりした体型の三十代半ばの髭面の男が左右を固めている。

「あ、あの……」

村野弘一が、愛想笑いを浮かべながら言った。

「……〈Mura〉です……。あの……どちらが〈泰〉さんですか？」

「そんなことはどうだっていい」

三十代半ばの髭面がドスの聞いた声を出した。

「例のものは持ってきたのか？」

「ええ」

「見せる」

「……あ、いや。その前に現金を見せて下さい」

中央の小太りが合図をした。左右の男二人が頷き、いきなり弘一に飛び掛かった。

「な、なにするんだ……」

抵抗むなしく、弘一は地面に抑えつけられ、両手を後ろ手に縛られた。

「よし」

小太りが言い、弘一に近づいた。髭面と長身の男は立ち上がり、後ろに下がった。小太りはかがみこみ、弘一の懐やポケットを探った。

「こいつ……もってやがらねえ」

小太りが呻いた。その瞬間、「ううっ！」と彼の背後の、髭面と長身が呻いた。

走り寄った美紀が、次々と二人の股間を蹴りあげたのだ。

髭面と長身は、股間を両手で抑えてしゃがみこんだ。つづいて美紀は、小太りの男の襟がみをつかみ、強引に前を向かせ、股間に膝蹴りを浴びせた。

「え？」

美紀はきよとした顔をした。手応えがない……。小太りの男も、ちよつと顔を顰めたただけだった。

小太りは、すかさず反撃した。美紀はパンチを浴びてよろめいた。

嘘……効いてない……。

だが、さすがに美紀はさつと態勢を建て直し、「ハアアアアッ！」と叫び、小太りの首に回し蹴りを浴びせた。小太りは吹っ飛び、建物の壁にぶつかって倒れた。

その間に、髭面が立ち直り、美紀に飛び掛かった。美紀はあやうくパンチをかわし、手首をねじあげ、足を払った。髭面は仰向けに倒れた。美紀は、髭面のみぞおちに向かってやはり仰向けに倒れ、同時に股間に肘打ちをうち下ろした。

「ぐえっ！」

髭面は蛙のような悲鳴をあげた。美紀はつづいて、髭面の顔面にも肘打ちを浴びせた。髭面は鼻柱を砕かれ、悶絶した。

「晴美！ 涼子！」

美紀が叫んだ。

村野弘一が立ち上がり、門に向かって走り出していた。

「そいつを捕まえて！」

晴美と涼子が車を出て駆け出した。

長身の男が美紀の背後からとびついた。美紀は、咄嗟に足を後ろにはねあげた。踵が長身の股間を直撃した。

「ううっ」

呻く長身に背負い投げを食わせ、背中を打つてもかく男の前に回り込み、股間に爪先蹴りを浴びせる。長身は両手で股間を抑え、転げ回って悶絶した。

一方、村野弘一は、両手を後ろに縛られ、おまけに股間のダメージがそうとう残っているらしく、前かがみにぎこちなく、足を引きずるようにして走っていた。たちまち追いつかれた。

「逃げるか、こいつ！」

晴美が弘一の背中にしがみついた。

「くらえ！」

涼子が前に回り込み、弘一の股間に膝蹴りを浴びせた。弘一が呻き、膝が落ちた。晴美は彼に覆いかぶさるようにして倒れた。二人は地面に転がってもがいた。弘一が何かの拍子に、晴美の胸をつかんだ。

「どこ触ってるの！ この馬鹿！」

晴美は弘一の手を払いのけ、仰向けに転がる弘一の股間にパンチを浴びせた。

「あがあ……」

弘一はそのまま失神した。

「はあはあ……」

涼子と晴美は、地面にへたりこみ、肩で息をしていた。

「やったね」

美紀が二人に駆け寄ってきた。

「こいつに逃げられたら、あとあとまずいことになってたよ」

「……どうする、こいつ？」

涼子が顔を上げて訊ねた。美紀は、息ひとつ乱していない。

「あんたたち二人は、今日、ボールバスターズクラブで、玉を潰したんでしょ」

「うん……」

「私はまだなのよ」

言うなり美紀は、失神した弘一の睾丸を踵で踏みつけた。

「よかった。まだ潰れてなかった」

美紀はにやりと笑い、全体重を踵に載せた。膨れ上がった弘一の股間が平たく潰れ、美紀の踵が地面に着いた。

「ぐはっ！」

失神していた弘一の体が大きくのけぞり、痙攣し、どきっと再び地面に背中をつけて動かなくなった。口から血反吐がはきだされていた。

「うくん、やっぱし快感！」

美紀は、両腕で己が上半身を抱きしめ、眼を閉じて身を震わせながら、もう一つの睾丸に踵を移動させた。

工場の内部はがらんどうだった。

稲垣泰一郎と、二十代の長身が、両手を縛られ、震えながらその隅に転がっていた。

「お、俺は、稲垣さんに金で雇われただけだあ……!!」

髭面が苦しうに悶えながら叫んでいた。

彼の下半身は裸にされ、腫れ上がった陰囊の根元にロープを巻き付けられていた。そのロープは建物の天井の滑車に結び付けられていた。

「強情ねえ」

美紀は、傍らのスイッチを押した。滑車が天井に向かって上昇した。男の陰囊が地面から一メートル近くにまで吊り上げられた。頭と両手、両足がだらりと垂れ下がっている。陰囊は、彼の体重を支え切れず、今にも千切れそうだ。

「どうすんの？」

晴美が、はちきれそうな陰囊を指で弾いた。髭面は悲鳴をあげ、号泣した。

「ほ、ほんとだよお。俺は何も知らないんだよ……」

「嘘つくんじゃない！」

涼子が、睾丸を指でつまみ、ぐりぐりと動かした。髭面はまたも絶叫。

「ねえ、お仲間があんなに苦しんでいるのに、何も感じないの？」

美紀が、稲垣と長身の顔を交互に見比べた。

「白状するのは、あんたたちでもいいのよ」

長身がおろおろした顔で稲垣に訴えかけるような表情を示した。稲垣が首を振った。

美紀がまたスイッチを入れた。滑車が増し、髭面の両手と両足が地面から離れた。髭面はジタバタともがいた。

陰囊はいまやメロン大に膨れ上がり、充血している。

「こんなことしちゃおうかなあ」

晴美が、ボクサーがやるように、陰囊にたてつづけにパンチを浴びせた。髭面はもはや叫ぶ気力もなく、白目を剥き、失神寸前。

「こんなこともしちゃったりして」

涼子は、拍手を打つように、両手でパチンと挟み込むように陰囊をはいた。

その瞬間、髭面の体がどさつと地面に落ちた。

「あ」

ロープの結び目に、赤黒い皮だけが残っていた。髭面は、血の噴き出す股間を抑え、痙攣していた。その傍らに、真っ赤に腫れ上がった睾丸が二つ転がっていた。

「あゝあ」

美紀が肩を竦めた。

「あゝあ」

涼子と晴美も肩を竦め「潰しちゃおうか」「そうだね」と言い合いながら、床に転がった鞆丸を踵で踏み潰した。

「じゃ、次はあんたよ」

美紀が長身の男に向かって顎をしゃくった。長身がびくりと身を震わせた。涼子と晴美が彼に向かって歩み寄った。

「ま、待ってくれえ！」

長身が叫んだ。

「ば、ばか。よせ」

稲垣が怒鳴った。

「お、俺は元ボールバスターズ・クラブのスタッフなんだあ！ この稲垣に頼まれて、手引きしただけなんだあ！」

「こ、こら……」

「この稲垣は、昔借金で首が回らなくなって、ボールバスターズ・クラブの蹴られ役をやって、玉を二つとも潰されたんだ、その恨みを晴らすために、コツコツ金を溜めて、俺たちを雇ったんだ」

「……う、嘘だ。でたらめを言うな！」

「本当のことだろうがよお！ ボールバスターズ・クラブをネタに、芸能プロを強請って、大金をせしめようって持ちかけたのはあんたじゃないか！」

「なるほどねえ」

美紀が呟いた。

「もうすでに潰されていたわけか。道理でさつき、手応えがないと思ったよ」

「やれやれ」

晴美が肩を竦めた。

「もう、あのクラブに行くのはやめたほうがよさそうね。スタッフの管理がまるでなっていないじゃない」

「そんなのありい！」

涼子が口を尖らせた。

「やつと、潰せるようになったばつかだというのに……」

「だったら、最後にこいつの玉を心ゆくまで潰しなさい」

美紀が涼子の肩をぼんと叩き、長身の男を指さした。

「そうだね」

晴美は、涼子を促し、長身の男の襟首をつかんで立たせたとした。長身の男はバタバタと暴れた。

「や、やめろ！ちゃんと白状したじゃないか」

その股間を、涼子は踏みつけるように踵で蹴った。長身は呻き、涙を流しながら痙攣した。晴美は、にやにやしながら、唇を舌で嘗めた。

「さてと……どうやって潰そうかな」

美紀は稲垣泰一郎に近づいた。

「さてと……あんたはどうしようかなあ……潰そうにも、もう玉はないし」

「……………」

稲垣は恐怖に眼を見開き、がくがくと震えた。

「もつとも、まだサオが残ってるんだよね」

美紀は、言うなり、稲垣の顔面にバックキックを浴びせた。稲垣は鼻柱を砕かれ、横倒しに倒れて呻いた。鼻孔から血が噴き出している。

美紀は、小柄な稲垣を部屋の隅まで引きずった。万力が置かれていた。美紀は稲垣を立て、ズボンのジッパーをおろし、ペニスを引っ張り出し、万力にはさんだ。

「これで、完全に男じゃなくなるね」

美紀の背後で絶叫が迸った。涼子と晴美が、瀕死の子鹿を前にした獅子のような目つきで長身の男を押さえつけ、おのおの一つづつ睾丸を握って、力をこめはじめていた。(おわり)